

# 攻撃の置き換えを表出する個人的特性の検討

B33802 齋藤知美

## 研究史

人は怒り感情の対処法として、攻撃の表出・不表出・抑圧を行う。攻撃性の種類や表出方法は抑うつ傾向のある人(上野ら、2009)や愛着形成のタイプによって差異が見られる(尾崎・杉本、2007)ことは先行研究で明らかになっている。怒り喚起事象と無関係な相手に表出される怒りを「攻撃の置き換え(displaced aggression)」という。攻撃の置き換えは、本来不要である対人トラブルを発生させたり、相手との今後の関係にも影響を及ぼしたりする恐れがある。現在攻撃の置き換えに関する研究は、環境や周囲の人間関係も要因として研究される TDA を軸とした研究が主である(淡野、2010)が、本研究は、攻撃の置き換えを行う個人の特性に焦点を当てて研究した。

## 目的

怒り喚起事象の後にも持続的に故意ではなく反復される認知傾向を怒りの反芻(anger rumination)という(Sukhodolsky, 2001)。Sukhodolsky(2001)は論文の中で、最初の挑発の後、個人の注意と思考が持続的に焦点化され、怒り事象に断続的に振り返るようになる。したがって、体験に対して反芻する傾向のある人は、怒りの維持を部分的に招く機能があるのかもしれないと述べている。つまり、怒りの反芻をする人は攻撃の置き換えを行いやすいと推測できる。また、反芻は問題に対処する適切な方略だという信念をもっており、この信念が反芻をする動機となっているのではないかと推測している。こうした信念はメタ認知的信念(metacognitive belief)と呼ばれる。Simpson&Papageorgiou(2003)は、怒りの反芻についてのメタ認知的信念について研究した。怒り制御に問題を抱えている 10 人の患者を対象に半構造化面接をし、怒り事象について述べてもらう間にポジティブやネガティブな反芻をしているか検討した。結果、8 人の患者は自己正当化を促進するポジティブな反芻をし、全ての患者はネガティブな反芻をしたことを明らかにした。よって、ネガティブなメタ認知的信念がある人は攻撃の置き換えを行いやすいといえる。本研究の目的は、怒りの反芻及び怒りに対するメタ認知的信念がどの程度影響しているのか検討することとする。

## 方法

使用した尺度は、

- ① 攻撃の置き換え傾向尺度(DAQ)(淡野、2008) 下位尺度は「怒りの反すう」、「報復の企図」、「攻撃の置き換え」で構成される。
- ② 怒り反芻に対するメタ認知的信念尺度(金ら、2014) 下位尺度は「怒り反芻に対するポジティブなメタ認知的信念」、「怒り反芻に対するネガティブなメタ認知的信念」で構成される。
- ③ 怒りの反芻尺度(中井ら、2003) 下位尺度は「報復についての持続的思考」、「ポジティブな反芻」、「コントロール不可能性」、「完結しない思考」で構成される。

平成 29 年 9 月、同年 10 月に私立大学生(男性 37 名、女性 25 名)を対象として調査した。調査方法は基礎教育科目の講義終了 10 分程度で質問紙を配布し、その時間中に回答してもらい回収した。心理学専門科目の講義開始に質問紙を配布し、講義終了時回収した。サンプル数は 128 枚であったが、記入漏れがあったため有効回答数は 64 枚であった(有効回答率 50%)。また、ID2039 は記入漏れが多く分析不可能であったためサンプルから除外した。

## 結果

DAQ を従属変数として重回帰分析を行った結果が以下の表 1 である。持続的思考・不完結思考・ネガティブなメタ認知的信念の 3 因子に有意な偏回帰が見られた。決定係数は.779 であった。また、ポジティブな反芻と、ポジティブなメタ認知的信念は攻撃の置き換えの表出を低減させることが明らかになった。

表1

要因		自由度 d.f.	パラメータ推定 値	標準化偏回帰係数 $\beta$	t 値	P
怒りの反芻 尺度	コントロール 不可能性	1	0.072	0.074	0.77	
	ポジティブな反芻	1	-0.080	-0.068	-0.79	
	持続的思考	1	0.546	0.529	6.85	***
	不完結思考	1	0.262	0.246	2.34	*
怒りに対す メタ認知的 信念尺度	ポジティブな メタ認知的信念	1	-0.144	-0.105	-1.29	
	ネガティブな メタ認知的信念	1	0.533	0.336	4.04	***
R <sup>2</sup>			0.779			***
			*;p<0.05	**;p<0.01	***;p<0.001	

### 考察

怒りの出来事に対して肯定的か否定的かで捉える他にも情報過多やキャパオーバーという点にも注目できる。人は日々の生活で膨大な情報を受け取り、処理している。勿論怒りの出来事も情報の一種であり、原因や対策を考えることは勿論精神的な労働になるし、人によっては過剰労働になる。精神的な労力を怒りの出来事に費やすと苛立ちは増幅し余裕もなくなってくる。その中で、家族や恋人、友人や見知らぬ人など、些細なことでも更に情報を発信する対象と関わると情報過多を起こし処理しきれなくなる。よって、攻撃の置き換えをしてしまうと考えられる。出来事の情報処理能力が低いとその分処理に時間もかかり労力も必要になってくる。ポジティブな反芻をする人は、反芻を有意義なものだと思っているため、比較的余裕をもって出来事について考えることが出来る。そのため、他に刺激を受け取っても情報過多になることが少なく攻撃の置き換えが起こらないのではないか。つまり、攻撃の置き換えは個人の情報処理能力にも要因があると考えることが出来る。

### 引用文献

- 上野真弓・丹野義彦・石垣琢磨 (2009). 大学生の持つ抑うつ傾向と攻撃性の関連-攻撃性の4つの下位尺度を踏まえて *パーソナリティ研究* **18** (1) 71-73.
- Simpson,C.& Papageorgioe,C., (2003). *Metacognitive beliefs about rumination in anger* *Cognitive and Behavioral Practice* **10** 91-94.
- Sukhodolsky,D. G., Golub,A., &Cromwell,E. N., (2001). Development and validation of the anger rumination scale *Personality and Individual Differences* **31** 689-700.
- 淡野将太 (2010). 置き換えられた攻撃研究の変遷 *教育心理学研究* *Japanese Association of Educational Psychology* **58** 108-120.
- 尾崎康子・杉本宜子 (2007). 青年期における愛着と攻撃性との関連 *人間発達科学部紀要* **2** 37-45.